

2024年10月27日（日）主日朝礼拝説教

『永遠の命とは』 井上隆晶牧師

ヨハネの手紙一 5章11～12節、ヨハネによる福音書 17章1～5節

①【父よ、時が来ました】

今日読んだ箇所は、イエス様が最後の晩餐の後に奉げられた祈りで「大祭司の祈り」といわれています。主が人類の救いのために、自ら大祭司となってお自身を献げられ、使徒たちと後世のすべての信徒たち、全教会のために献げられた祈りです。

1節にこうあります。「イエスはこれらのことを話してから天を仰いで言われた。父よ、時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すようになるために、子に栄光を与えてください。」「父よ、時が来ました」とありますが、この時とは十字架にかかって死ぬことです。この時のために、キリストは天から降り 33年間待たれたのです。「あなたの栄光を現すようになるため」とはどういう意味でしょう。栄光とは見えない神が現れることをいいますから、ここで主は「神よ、十字架を通して目に見えないあなたがどのような方であるのかを人々に現わすことができるようにしてください。私にその栄光の力をお与えください。」と祈ったのです。そしてその通りに十字架の上で神がどのような方であるのかをイエス様は現しました。神は人間の敵ではなく、人間の罪を負い、人間の死を連帯される方であることを明らかにしたのです。キリストは「父よ、彼らをお赦しください」と祈って、自分を殺す者を赦しました。神は愛であり、最後まで完全な愛であり続けました。何をしてもこの方からは愛と赦ししか出てきませんでした。呪いも怒りも憎しみも一滴も出て来ないのです。これが神です。「私は地上から上げられる時、全ての人を自分のもとへ引き寄せよう。」（ヨハネ 12：32）といわれたように、このイエス様の犠牲と祈りによって、おびたしい人たちがキリストのもとに引き寄せられ天に引き上げられました。彼の死によって獲得された人々の数は、生前に彼が獲得した人の数どころではありませんでした。

②【永遠の命とは】

2節では「あなたは子にすべての人を支配する権能をお与えになりました。そのために子はあなたから委ねられた人すべてに、永遠のいのちを与えることができるのです。」と祈られました。キリストは御自分に与えられた人たちに永遠の命を与えることができることを喜んでおられます。そして3節で「永遠のいのちとは、唯一のまことの神であられるあなたと、あなたのお遣わしになったイエス・キリストを知ることです。」と説明されました。この「知る」というのは知識ではなく体験の言葉です。「アダムは妻エバを知った」（創世記 4：1）と同じであり一体になることを意味しています。結婚することと言い換えても良いでしょう。ですから父なる神とイエス様を知るとは、三位一体の神様と一体になること（結婚）で

あり、この一体になることが永遠の命なのです。人間の創造目的とは神と一体になり、永遠に生きる者となることにあります。

では、具体的にどうしたら神と一体になれるのでしょうか。私たち被造物は父なる神と直接に一体にはなれません。神を見た者、神に触れた者は死ぬからです。しかし、神よりの神、光よりの光である御子キリストとは一体になれるのです。ちょうど母親が赤ちゃんに合わせて、自分の力を弱めてそっと抱き上げるように、彼は人間と交わるためにご自分の神性の光を調節されたのです。既に神キリストは肉を取る練習をされました(受肉)。私たちは神化された御子の人間性につながり、それを通して御子の神性と一体になるのです。それによって父と聖霊は来て私たちの中に住まわれます。王の宮殿に招かれた者は、まずは宮殿の入り口でキリストの衣をもらい、最後に王が登場して、私たちを招き入れて下さるのです。すべてには順序があるのです。キリスト神と一体になることは、具体的には洗礼によって実現します。「キリスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた私たち」(ローマ6:3)とあるように、洗礼によってキリストに結ばれた私たちの上に、既にこの世から「永遠の命」が与えられます。ヨハネは手紙の中で「神が永遠の命をわたしたちに与えられたこと。そして、この命が御子の内にあるということです。御子と結ばれている人にはこの命があり、神の子と結ばれていない人にはこの命がありません。」(1ヨハネ5:11~12)と書いています。

信仰とは「神との交わりである」と神学校の先生は言っておられました。私たちは教会で神と一番交わるのです。聖体を食べ、聖なる言葉を聞き、聖霊の息吹を呼吸し、祈りをささげます。教会は新しいエデンの園であり、キリストこそ命の木です。彼に手を伸ばす者は永遠に生きるのです。このように永遠の命は、キリストとの交わりの中にあります。命とは交わりの状態です。命の存在と言えるのはキリストだけです。彼は最初からおられた命だからです。私たちは存在ではなく状態です。私たちは創られた者であって初めからの命と交わり続けることによってのみ生きのです。キリストと交わり続けなければ、その人の命は細くなり、やがてしぼんでしまうでしょう。教会を去り、聖体を食べず、神の言葉を聞かず、祈りもせずいたら、どうして神と交わっているといえるでしょう。神キリストとの交わりが深くなればなるほど、その人は輝きだし、神の命は満ちてきて、キリストの似姿は成長します。それは天国も地獄も同じです。地獄という場所を神は創造されませんでした。地獄は存在ではなく神から離れた状態です。キリストと交わることが天国です。キリストと深く交わればその人の中に天国が広がり、キリストから離れたらその人の中に地獄が広がるでしょう。

③【キリストの栄光】

5節にイエス様は「父よ、今、御前で私に栄光を与えて下さい。世界が造られる前に、私がみもとで持っていたあの栄光を。」と祈られました。世界が造られる前に、キリストが父なる神のもとで持っていた栄光とは「神性の輝き」のことです。こ

れこそヨハネが福音書の冒頭で書いたことです。「言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。」(ヨハネ1:1) 父と同質なる栄光をキリストはもっておられます。それは人間が見ることも近づくこともできない光です。山の上で変貌された時、イエス様はその栄光を少しだけ見せられました。それでさえも弟子たちは直視できませんでした。父は太陽よりも輝く光の本体であり、キリストはその光から出た父と同じ性質をもつ光です。この方は33年間、この光の上に人間の肉という衣を着てその光を隠しておられました。今、その肉の衣が槍と釘によって裂かれ、そこから光が洩れたのです。その光が百人隊長の顔を照らしたので、彼は「**本当にこの人は神の子だった。**」(マタイ27:54)と告白しました。私はキリストの両手、両足、その脇腹から流れ出た血と水を畏れます。その下に行って神性が浸透した血を両手ですくいたい。何ともったいないことでしょう。しかしこれこそ彼の願いでした。ご自分の光と命と赦しを分配するために、彼は裂かれたのです。

今日私はキリストを知ることが永遠の命であることを話しました。

●英国のレスリー・ウェザーヘッドが、アメリカのマンハッタン地区の牧師会で話をすることになりました。ところが、彼の乗った船は霧で大幅に遅れ、牧師たちが長時間待たされることになりました。ようやく到着したとき、ウェザーヘッドはこう言いました。「みなさんは、ずいぶん長い時間お待ちになりましたが、私はたった一つの単純な質問をするために、長い船旅をやって来ました。その質問というのは『みなさんはイエス・キリストをご存知ですか』というものです。」

初代教会では、使徒であるかどうかの認定基準は「復活した主に会ったことがあるかどうか」でした。パウロは「私は…使徒ではないか。私たちの主イエスを見たではないか。」(Iコリント9:1)と語ります。使徒とは目撃者なのです。

●私は神学生の時に、復活したキリストに出会いました。不平不満で一杯であった私にキリストは触れて下さり「私はあなたにすべてのものを与えた。私の衣も与えた。もう何も残っていない。ごめんなさい。」と言われました。そのキリストに触れられた瞬間にすべての恨みが飲み込まれて消滅し、喜びがお腹の底から湧き上がって来ました。これこそ永遠の命を体験した瞬間でした。キリストを体験した人は同時に彼の永遠の命に満たされます。同じなのです。声を聞いたのはその一度だけですが、その後も主が生きて働いておられるのをこの目で見ました。一度キリストを知った人は、この喜びが分かるのです。夫婦になった者は相手を知らないとは決して言わないものです。

神は本気でご自分を求める者にはその姿を現してくださいませ。その人はキリストを知り、永遠の命の断片を手に入れるのです。キリストを知る事、体験することに是非人生の時間を用いてもらいたいと思います。